

令和8年2月27日
農推第1343-11号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
特に発生に注意(3月)【野菜類(施設栽培):コナジラミ類】	1
野菜【たまねぎ、なす(施設栽培)、野菜類(施設栽培)】	2~3
果樹【ぶどう(施設栽培)、もも】	3~4
その他注意すべき病害虫【トマトキバガ】	4

特に発生に注意(3月)

野菜類(施設栽培):コナジラミ類



タバココナジラミ成虫



タバココナジラミ幼虫



コナジラミ類成虫*



トマト黄化葉巻病発病株

特徴

- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ トマトやミニトマトでは、タバココナジラミが、トマト黄化葉巻病を引き起こすTYLCV(トマト黄化葉巻ウイルス)を伝搬する。また、タバココナジラミやオンシツコナジラミが、トマト黄化病を引き起こすToCV(トマト退緑ウイルス)を伝搬する。
- ◆ きゅうりでは、タバココナジラミがキュウリ退緑黄化病を引き起こすCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)を伝搬する。

防除のポイント

- ◆ 苗によるコナジラミ類の持ち込みを防ぐため、育苗中の防除を徹底する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.4mm以下のネットを展張し、コナジラミ類の侵入を阻止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底する。
- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルス病の感染株は施設外へ持ち出し処分するとともに、ウイルスを媒介するコナジラミ類の防除を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、ベストガード水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、きゅうりなど)、アグリメック(なす、トマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

病害虫発生予察特殊報第4号「トマト黄化病」(令和8年1月21日発行)
もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/260121_tokusyuhou04_tomatooukabyou.pdf

次回の情報は3月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

野菜

たまねぎ

べと病



越年り病株

特徴

- ◆ 育苗時や定植後に、被害残さ等から感染し、越年り病株として1～2月に病徴を現し、周辺への伝染源になる。越年り病株は、葉色は光沢のない淡黄緑色で、生育も劣る。
- ◆ 好適条件(気温15℃前後で多雨)が揃うと急速にまん延する恐れがあることから、農薬の予防散布が重要である。

防除のポイント

- ◆ 越年り病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、ダコニール1000等を、発生を認めたら、ベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドMZ等を散布する。

ネギアザミウマ(えそ条斑病)



ネギアザミウマ成虫



えそ条斑病

特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株はほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤(鱗茎類 アザミウマ類)、ディアナSC(アザミウマ類)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

なす(施設栽培)

うどんこ病



葉表の病斑



葉裏の病斑

特徴

- ◆ チッソ過多、気温が25～28℃で湿度が50～80%、日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、バルクート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたら、パンチョTF顆粒水和剤、パルミノ等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

野菜類(施設栽培)

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

※適用作物は一部を抜粋して記載しています。使用にあたっては、ラベルの登録内容を確認してください。

特徴

- ◆ 施設栽培では、苗からの持ち込みにより本ぼでの発生が多くなる。
- ◆ なすでは、ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。
- ◆ きゅうりでは、ミナミキイロアザミウマがキュウリ黄化えそ病を引き起こすMYSV(メロン黄化えそウイルス)を伝搬する。

防除のポイント

- ◆ 開口部を目合い0.8mm以下の赤色ネット等で被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 発生が見られたら、グレースシア乳剤(なす、きゅうりなど)、アフアーム乳剤(なす、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

果樹

ぶどう (施設栽培)

灰色かび病



花がらでの症状

特徴

- ◆ 多湿条件で発生が多くなる。
- ◆ 胞子が雨や風によって飛散し、傷口等から感染する。

防除のポイント

- ◆ 適切に換気を行い、湿度を下げるようにする。
- ◆ 第1回ジベレリン処理から結実始めの間にビニールでマルチングをする。
- ◆ 花がらが発生源となることが多いので、開花後に花がらを取り除く。
- ◆ 開花直前または落花直後にオンリーワンフロアブル、ゲッター水和剤等を散布する。

ハダニ類



カンザワハダニ

特徴

- ◆ 加温機の近くやダクトの先端部等、高温になりやすいところから発生することが多い。

防除のポイント

- ◆ 発生を確認した場合は、ダニオーテフロアブル、スターマイトフロアブル等を散布する。

もも

せん孔細菌病



春型枝病斑



葉の病斑

特徴

- ◆ 春になると越冬した病原菌が増殖し、春型枝病斑(スプリングキャンカー)を生じる。
- ◆ 病原細菌は、雨水に混じって分散し、気孔や傷口から感染する。

防除のポイント

- ◆ 開花期直前にムッシュボルドーDFを散布する。
- ◆ 春型枝病斑を見つけたら、落花期までに切り取ってほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 風当たりの強いほ場では防風ネットを設置する。

その他 注意すべき病害虫

野菜:トマト・ミニトマト

トマトキバガ



府内で誘殺された成虫

特徴

- ◆ 寄主植物はトマト・なす・ピーマン・とうがらしなどの主になす科植物である。成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。
- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する。
- ◆ 果実では、幼虫が侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する。

防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JA に確認する。
- ◆ 施設栽培では、施設開口部に目合い1mm以下のネットを展張し、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC、グレーシア乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。

「トマトキバガ 生態と防除」(令和6年3月発行)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tomatokibaga_osaka.pdf